

無についての問い方・語り方

—「無ではなくて存在」ではなく—

入不二基義（青山学院大学）

I 序論

「なぜ、全く何もないのではなくて、何かがあるのか」「なぜ、無ではなくて存在なのか」という問いは、ライプニッツ由来の、そしてハイデガーが改めて根本的な問いとして提示した形而上学的な問題である。

そのハイデガーの「存在と無」をめぐる言説を、「疑似問題」であり、消し去られるべき悪しき「形而上学」の典型であると批判したのは、カルナップであった。しかし、そのカルナップを祖先（源流）の一人とする、比較的最近の分析哲学においてさえも、この問いは正面から問われ続けている。二つだけ例を挙げておこう。

ロバート・ノージックは、その著書 *Philosophical Explanations* (1981) の第二章で、「なぜ何もないのではなく、何かがあるのか？」(Why is there Something rather than Nothing?) という問いに対して、この問いが答を持つとしたならば、それはどのようにして可能なのかを検討している。また、ピーター・ヴァン・インワーゲンは、「そもそもなぜ何かがあるのか」("Why Is There Anything at All?") という論文を 1996 年に書いて、統計学的な考察を提示している。

私は、この形而上学的な問いを「斜めから」眺めてみたい。「正面から」立ち向かうのではなく、その問いの媒介部分である「ではなくて」を疑問視したい。何かがあること（存在）と全く何もないこと（無）を、「(一方)ではなくて(他方)」という排中律保存的な否定関係によって媒介することは、形而上学的な問いとして不徹底なのではないか、という疑念を持っているからである。

その疑念が行き着く先をあらかじめ述べておくならば、次のようになる。何かがあること（存在）と全く何もないこと（無）を、形而上学的に追い詰めた場合には、「(一方)ではなくて(他方)」という排中律保存的な否定関係によっては媒介できなくなるだろう。むしろ、「一方でありかつ他方」という（疑似）矛盾的な関係であるか、あるいは両者は端的に無関係であるかになるだろう。

以下の考察は、「ある」を思弁的に追跡する第 II 節「「ある」追跡の道」と、「ない」を思弁的に追跡する第 III 節「「ない」追跡の道」の二つに分かれる。前者では『創造的進化』の中のベルクソンの議論を、後者では「そもそもなぜ何かがあるのか」という論文におけるインワーゲンの議論を、「踏み台」として（あくまで「踏み台」としてのみ）利用する。そして、いくつかの考察を経て、存在と無の（疑似）矛盾的な癒着関係と、存在と無の端的な無関係の二つを見いだすことになるだろう。

II 「ある」追跡の道

ベルクソンは『創造的進化』の中で、「無」の観念に対する批判を展開している。そして、「何かが存在するのはなぜか」という形而上学的な問いを、意味を欠いた問いであり、「無」という疑似観念のまわりに立てられた「疑似問題」とであると断じている。

ベルクソンによれば、「無」の観念を生み出すかのように思われる操作—全ての事物の絶対的な消失—というのは、実は、任意の事物を次々と消去していくことである。消去は、欠如（無）を生み出すかのように見えるが、ほんとうはそうではない。或る事物が消去されたとしても、実は別の事物によって埋まっているのであって、ほんとうは「欠如（無）」ではなく、別の事物への交代による「充実」なのである。

つまり、Aを消去することは、Aの欠如（無）を生み出すかのように見えるが、ほんとうは欠如（無）など生じていない。Aの代わりに（A以外の何か）たとえばBが、Aに取って代わっただけで、実はBによって充実している。ただ、Bに対して関心を向けないことによって、あたかも欠如（無）が生じたように見えるだけである。さらに、そのBを消去したとしても、Bの代わりに（B以外の何か）たとえばCが、Bに取って代わっただけである。次々と事物を消去しても、こういう消去＝交代がどこまでも続く。したがって、どこまでも消去を続けることはできても、それは全面的な無には決してなりえない。というのも、消去の実態が別の事物への交代であるかぎり、どこまでも別の事物による充実が残り続けるからである。

あるいは、「全面的な無」には至れない理由を、次のように言っても同じことである。全面的で絶対的な無という観念は、それを生み出すための「消失＝交代という操作」自体を不可能にしてしまうから、正当なものではありえない。「全面的で絶対的な無」という観念は、そういう自己矛盾を含んでいるのだと、ベルクソンは批判する。

ベルクソンのアイデアのポイントは、消去の実態を交代であると見なす点にある。或る事物を消去することは、実は別の事物が取って代わることであり、消去・消失とは交代・交換である。消去・消失が、一見「欠如（無）」であるかのように思ってしまうのは、人間の関心等に依存して生じる見かけの姿なのであって、実在の姿としては、別の事物による充実態なのである。その別の事物が当面の関心の外にあるために、「欠如（無）」が生じたように見えているだけなのである。

ベルクソンの「無」の観念批判の中には、肯定を否定に対して非対称的に優位に置く「肯定主義」を見て取ることができる。この肯定主義の元基^{もともと}には、否定という操作を本質的に含む（ということは人間の関心や行動に依存する）言語よりも、言語以前のな実在やその直観の方を優位に置く考え方があるだろう。消失・消去の実態は交代・交換であるというアイデアは、言語以前のな実在・直観を優位に置くことの言語内的な投影物である。

ベルクソンの「無」の観念批判は、ある意味で正しいと思う。それは、「肯定による差異化」と「否定による差異化」の相補的な関係の一局面を正確に捉えているという意味において、である。

まずは、「肯定による差異化」と「否定による差異化」という二種類の差異化（言語の基本機能）について確認しておこう。両者が別種の差異化であることは、それぞれを「反対(contrary)」と「矛盾(contradiction)」という二種類の対立（cf. アリストテレス）に対応させてみると分かりやすい。

前者の一例として「黒である／白である」という差異化を、後者の一例として「黒である／黒ではない」という差異化を考えることができる。前者の「肯定による差異化」の場合には、中間があり得ること（ex. 灰色である）、両項が同じ観点において同時に共に真であることはあり得ないが（ \neg （黒 \wedge 白））、両項が共に偽であることはあり得る（ \neg 黒 \wedge \neg 白）。したがって、「黒である／白である」は「反対(contrary)」という対立関係に基づく差異化である。一方、後者の「否定による差異化」の場合には、中間はあり得ず（cf. 排中律）、両項が共に真であることも共に偽であることもあり得ない。したがって、「黒である／黒ではない」は、「矛盾(contradiction)」という対立関係に基づく差異化である。

肯定による差異化は、「充実」の全体を指向しつつも「全体」へは行き着かない。たとえば、色の名前をいくら列挙しても、色の全体は覆い尽くせない。一方、否定による差異化は「欠如」を発生させることによってこそ、（その行き着かない）「全体」を立ち上げる。たとえば、「黒である」領域に「黒ではない」という欠如領域を加えることによって、色領域の「全体」が構成される。

しかも、この二種類の差異化は互いに補完し合っている（相補的である）。一方では、肯定による差異化が指向しつつも行き着くことができない「全体」を、否定による差異化が先取的に提供する。他方では、その「全体」を構成するための「欠如」は、肯定による差異化（命名）が埋めることになっている。つまり、二種類の差異化は、欠如と全体と充実をめぐって相補的に働いている。

ベルクソンの「無」の観念批判は、この二種類の差異化（の相補的な関係）によっては、けっして絶対的な「無」の観念に至ることができないことを、正しく捉えている。この相補的關係における「欠如（無）」は、全体を構成するために働くのであって、けっしてそれ自体が「全体」になることはない。しかもほんとうは、その「欠如（無）」も、原理的には肯定形によって埋めることができる「充実態」なのである。つまり、ベルクソンの「無」の観念批判は、二種類の差異化の相補的な関係における「肯定の優位」「否定の劣位」を、正しく捉えている。

しかし、「消去＝交代」というアイデアに基づいたベルクソンの「無」の観念批判は、まだ不徹底である。なぜならば、「欠如（無）」を肯定形（充実態）へと回収することを可能にしているのは「交代」というアイデアであるが、その「交代」ということをそもそも可能にしているのは、（否定的な「欠如（無）」とは異なる）別種の「空白（無）」だからである。「消去＝交代という操作」は、その「空白（無）」をなくしてしまふことができない。それどころか、「消去＝交代という操作」は、「空白（無）」を介さなければ作動しない。

別種の「空白（無）」とは、「交代」が「交代」であるために要請される仮想的な「空白

の場」あるいは「交代の瞬間」である。AがBへと「交代」するという観念には、AによってもBによっても占めることのできる仮想的な場、あるいはAでもBでもない仮想的な瞬間が、含まれている。そのAにもBにも束縛されないニュートラルな「空白の場」「交代の瞬間」が仮構されて、それを介することによって、二つの肯定項のあいだで「交代」が生じうる。

もちろん、「空白の場」「交代の瞬間」が、AやBという肯定項と並ぶ第三の実体としてあるわけではない。そうではなくて、「交代」という観念が、そのような仮想を必要とするのであり、その仮想を介してこそ、二つの肯定項がただ単に並んであるのではなくて、一方が他方に置き換わるという変化、すなわち「交代」が可能になる。

このような仮想的な「空白（瞬間）」という無は、「 $P \vee \neg P$ 」（排中律）の中にも見いだせる。それは、「 $\neg P$ 」のところに表れている「欠如」とは違う。むしろ、「空白（瞬間）」は、「 \vee （または）」の部分にこそ表れている。それは、PによってもP以外によっても占めることができる「空白」であり、まだPにも $\neg P$ にも確定していない「瞬間」である。排中律は、そのような仮想的な「空白（瞬間）」という言語的な装置を介して、一つに決まっていざるをえない現実を（ということは、ニュートラルな「空白（瞬間）」など現実にはないことを）語る。排中律は、言語という装置と現実そのものとの接触点なのである。

このように、或る項と別の項のあいだでの「交代」や「選択・確定」には、（「欠如」とは異なる）仮想的な「空白」が入り込まざるをえない。それは、「交代」や「選択・確定」が差異化を前提とするからである。複数の項のあいだの差異と、その「あいだ（空白）」という仮構が言語によって立ち上がらないかぎり、「交代」や「選択・確定」は成立しえない。

結局、肯定主義に立つならば、「欠如」という無も「空白」という無も、言語という差異化の装置が立ち上げる「仮想」となる。そして、肯定主義をさらに徹底するならば、その「仮想」から滲み出してくる「充実」あるいは「現実」を、その「仮想」から解放して（「肯定／否定」や「肯定1／肯定2」という差異化の上に乗った肯定から解放して）、差異化以前の肯定として強調することになるだろう。

その観点から言えば、「消失＝交代」というアイデアによって、肯定主義を唱えることは、まだ不十分なのである。むしろ、肯定主義を徹底するためには、或る項と別の項のあいだでの「交代」や「選択・確定」さえも不可能になる方向へと向けて、差異化の装置（すなわち言語）から離れなければならない。それは、差異なき（差異化以前の）一つに決まっていざるをえない「現実」あるいは「充実」へと向かうことに他ならない。

そのような「現実」あるいは「充実」には、二つの候補がありうる。一つが「形相なき質料的現実」であり、もう一つが「<現に>という現実性そのもの」である。前者は「差異化以前の実質」「まだ概念化されていない生の原質^{なま}」であり、後者は「無内包の現実」「内容と無関係に現にあること」である。そして、この二つの候補のうち、肯定主義の徹底としては、後者の方がより相応しいのだが、まずは前者の確認から。

肯定による差異化も否定による差異化もなされておらず、また仮想的な「空白（無）」の

入り込む余地もない「質料（実質・原質）」とは、いわゆる「物質」ではない。なぜならば、「物質」とは、すでに日常や科学などを介して（すなわち言語を介して）、概念化・差異化を被っているものだからである。むしろ、「形相なき質料的現実」とは、「物質」もまたそこから切り出されてくるしかない「<地>としてのマテリアル」である。そのような「^{なま}生の原質」においては、「交代」や「選択・確定」はそもそも成り立つ余地がないし、その意味で「一つに決まっていざるをえない現実」である。

とはいえ、この「形相なき質料的現実」は、概念化・差異化に対して開かれてはいる、あるいは概念化・差異化を待っている。その意味で、「形相なき質料的現実」は、概念化・差異化以前の存在ではあっても、それを概念化・差異化することになるわけだし、概念化・差異化のための原・素材を提供できる。

それに対して、もう一つの候補（後者）の「<現に>という現実性そのもの」「無内包の現実」は、「概念化・差異化に対して開かれて（概念化・差異化を待つ）」などいない。むしろ、「概念化・差異化」とはそもそも関係を持つことができない。前者の「マテリアルな現実」も後者の「無内包の現実」も、ともに「切れ目なきベタ」というあり方をしてい

る点では同じであるが、その「ベタ性」が異なる。切れ目がまだ入っていないという「ベタ」と、切れ目ということがそもそも意味を持たないという「ベタ」の違いである。

「無内包の現実」とは、概念内容の違いとして決して現れることのない「現に（ある）」という現実性のことであり、それが全てでそれしかないというあり方（全一性）のことである。この「絶対現実」は、現実の中身とはいっさい関係なくこの現実なのである。

ここで、カントの「現実的な100ターレルと可能的な100ターレル」が思い出されるかもしれない。しかし、次の点に気をつけなければならない。

カントの場合には、現実的なものと可能的なものは、概念的には両者は同一であるが、（経験の実質的条件である）感覚に関連させることによって、区別されうる。一方、私が言う「無内包の現実」「絶対現実」は、感覚とも無関係である。言い換えれば、私の言う「現実性」は、概念と感覚のあいだの違いとしてではなく、（概念であろうと感覚であろうと）いっさいの内容・内包を持つものと、内容・内包とは無関係である副詞的な力とのあいだの違いとして考えられている。

どんな内容・質を持つ「感覚」であっても、それだけで現実性が与えられるわけではない。たしかに、現に感覚していること（現実の感覚）ならば、現実性を与えることができるが、それは、あらかじめ現実性を「感覚」に付与しているからにすぎない。

同じことは、「現前」や「直接経験」についても言える。たとえば、何かが現前することや何かを直接経験することが、現実性を与えると誤解してはならない。話は逆である。「現前」や「直接経験」は、「現に」や「今まさに」という副詞性があらかじめ刷り込まれているのでない限り、それだけでは（すなわち「現前する何か」「直接経験の内容」によっては）、現実性を与えることはできない。逆に、たとえ「現前」していなくとも、たとえば「潜在」という仕方であっても、「現に潜在している」かぎりには、それもまた「現実」であることに

変わりはない。その意味で、「現実性」は、「現前」「直接経験」とは別のことである。

さらに気をつけるべき点を述べれば、カントは、現実性を様相の一つと捉えて、可能性と対置しているが、私が言う「無内包の現実」「絶対現実」は、必然性・偶然性・可能性などの様相と相並ぶ一様相ではない。むしろ、まず「現に（ある）」ということが、他のすべての様相に先立ってあって、そのうえで（つまりまず現実があったうえで）初めて、観点や文脈に応じて、その端的な現実内に包・中身を加えることで、必然や偶然という様相のもとで見ることができる（あるいは、現実を諸可能性の中の一つであるかのように見なすこともできる）。その意味で、「無内包の現実」「絶対現実」は無様相である、あるいは、「無内包の現実」「絶対現実」においては様相が潰れていている。

「無内包の現実」以上の充実態は他にはない。たしかに、「マテリアルな現実」もまた、まだ概念化・差異化されていないし、欠如を含んでいない充実態（ベタ）である。しかし、「無内包の現実」は、「まだ概念化・差異化されていない」のではなくて、「原理的に概念化・差異化できない」のであり、「欠如を含んでいない」のではなくて、「欠如ということが意味を持ちえない」のである。その意味で、「無内包の現実」「絶対現実」は、「マテリアルな現実」以上の充実態（ベタ）である。

また、「無内包の現実」の全一性（それが全てでそれしかないこと）は、否定による差異化（欠如の導入）によって構成される「全体性」とは違うことにも注意しておこう。否定によって構成される「全体性」は、ドメイン（議論領域）（ex. 「黒 \vee 一黒」の場合は「色領域」がドメイン）という仕方で境界線を持つものに対して、現実には、むしろ、そのような境界線がないことによって「外がない」のである。ここには、限界を持つ全体と限界を持たない全体との違いがある。

こうして、肯定主義の極北（「ある」の最右翼）には、差異化・概念化された（交代が可能な）肯定項でもなく、マテリアルな充実態（ベタ）でもなくて、無内包の現実・絶対現実（現にという現実性そのもの）が位置する。

こうして「ある」の最右翼に位置づけられた「無内包の現実」「絶対現実」は、ある種の「(擬似) 矛盾」というあり方をしている。それは、以下のようなことである。

現実には、特定の内容・内包とはまったく無関係に（特定の認識論的な内容を持つことなく）、ただ端的にあるだけである。「無内包の現実」においては、存在論的に「ある」ことと、認識論的に「ない」ことが一つに重なっている。もっとも強い意味で「ある」と言える現実には、認識論的な観点からは「ない」のであり、あるいは逆に、どんなに豊かな内包が「ある」としても、（その認識論的な内容からだけでは）けっして「現にある」という存在論的な現実には導くことはできない。そのような仕方で、「無内包の現実」「絶対現実」は、「ある」かつ「ない」という矛盾したあり方をしている。

もちろん、これは厳密な意味での「矛盾」ではない。というのも、存在論的な観点からは「ある」、かつ認識論的な観点からは「ない」ことは、文字どおりの「矛盾」ではないからである。「 $P \wedge \neg P$ 」は矛盾であるが、「(ある観点において P) \wedge (別の観点において $\neg P$)」

は矛盾ではない。観点が区別されているかぎり、厳密な意味での「矛盾」にはならない。

しかし、重要なことは、厳密な意味での（同時に同一の観点のもとでの）「矛盾」にはならないということではなくて、むしろ「無内包の現実」における「ある」かつ「ない」は、「ユニット形成的な矛盾」だということである。「ユニット形成的な矛盾」とは、たとえ観点（時点）を跨いだ「疑似的な矛盾」ではあっても、それによってこそ、一つの（それ以上に分割しては意味を失ってしまう）ユニット（単一体）を形成するように働く矛盾のことである。

たとえば、「メビウスの帯」は、「ユニット形成的な矛盾」を含んでいる。つまり、「表でもあり裏でもある」という（疑似）矛盾的なあり方をすることによってこそ、「メビウスの帯」というユニット（単一体）になり得ている。厳密な意味での（同時に同一観点のもとでの）「表かつ裏」ではなくて、「（ある観点・ある時点で）表かつ（別の観点・別の時点で）裏」ではあるけれども、まさにそういうあり方をしていることが、メビウスの帯をメビウスの帯として構成している。

同様に、「無内包の現実」「絶対現実」は、存在論的・認識論的という観点を跨いでではあるが、「ある」かつ「ない」という（擬似）矛盾的なあり方をすることによって、当の「無内包の現実」「絶対現実」であり得ている。（ちなみに、「現にある」という現実の中には、独特の仕方では「ない」ことが食い込んでいる点も思い出しておこう。「現実の外はないのは、境界線そのものがないからである」。）

この局面、すなわち「無内包の現実」における「ある」かつ「ない」という局面においては、「なぜ「ない」のではなくて「ある」のか？」という問いは、うまく機能しない。というのも、「無内包の現実」においては、「ある」と「ない」は、<ではなくて>によって繋がれる背反的な関係にはなくて、むしろ「ある」かつ「ない」というユニット形成的な矛盾の関係にあるからである。

それでもなお、「無内包の現実」「絶対現実」についても、現実が「現にない」ことは可能であって、「なぜ「現にない」のではなくて「現にある」のか？」というように、<ではなくて>によって媒介された問いが成立するかのようと思われるかもしれない。

しかし、そうではない。ここには二つの問題がある。一つは、最右翼に位置する「存在」すなわち「無内包の現実」「絶対現実」に対して、最左翼に位置するような「無」はあるのか、もしあるとすれば、それはどのような無なのか、という問題である。これは次の第 III 節において追跡する。もう一つは、「ではなくて」という否定関係によって媒介することに起因する問題である。

そのように否定関係によって「存在」と「無」を媒介したとたんに、すでに概念化・差異化を被った「（内包のある）存在」とその欠如や空白としての「無」という言語内的な水準へとスライドしてしまう。つまり、最右翼・最左翼ではなくて、中間的な「存在」と中間的な「無」どうしの否定関係になってしまう。なぜならば、「ではなくて」という否定関係自体が、言語の基本機能である差異化に他ならないからである。もちろん、言語内的な

水準においてならば、「ない」のではなくて「ある」は、ふつうに成立する。（「目の前にあいつがない」のではなくて、「目の前にあいつがいる」というように。）

しかし、かの形而上学的な問いによって問われるべき水準は、そのような（ふつうに成立するような）言語内的な水準ではないだろう。だとすれば、「存在（ある）」の最右翼を追跡したのと同様に、こんどは「無（ない）」の最左翼へと向かわなければならない。

III 「ない」追跡の道

インワーゲンは「そもそもなぜ何かがあるのか」という論文の中で、「なぜ、全く何も無いのではなくて、何かがあるのか？」という問いに対して、確率的な論証とでもいうべき議論を提示している。それは、存在論的な証明（必然者の存在証明による無の不可能性の証明）とは違って、「全く何も無いこと」が、（不可能ではないにしても）ありそうにない(improbable)ということを示す議論である。

その議論のエッセンスは、次のようにまとめることができる。無限個の可能世界があるとすると、そのうちのどれが現実であるかの確率は、どの二つの可能世界についても等しい。そして、存在者が全く何も無いような可能世界（空っぽな可能世界）は、その中でたかだか一つだけであることによって、それが現実である確率はゼロになる（一方、何かが存在する世界が現実である確率の方は、その一つを除いた他の無限個の可能世界のうちの任意の世界が現実である確率である）。したがって、「全く何も無い」ことは、確率的に「ありそうにない(improbable)」ということになる。

もちろん、この議論は多くの問題点を含んでいる。たとえば、可能世界という装置の利用、等確率の仮定、全く何も無い可能世界（空っぽな世界）の個数の問題、空っぽな世界の単純さ(simplicity)の問題等々。インワーゲン自身も、その論文の中で、自らの前提（論点）を他の論証によって支持できないかどうかを検討している。しかし、ここで私に興味があるのは、その各諸論点の検討ではない。

私が指摘しておきたいことの一つは、このインワーゲンの議論の中にも、二種類の差異化（肯定による差異化と否定による差異化）が、或る変形された仕方で働いていることであり、もう一つは、インワーゲンの議論自体の中に、（ベルクソンの場合と同様に、しかし逆方向に）その議論自体を越えていくエレメント（すなわち、別種の「無」）を見て取ることができるということである。

一つ目の論点から。肯定による差異化と否定による差異化は、「欠如と充実と全体」をめぐって相補的に働いていることは、すでに述べた。しかし、無限の諸可能世界とその中の一つとしての空っぽな世界というインワーゲンの設定においては、その相補的な関係が、或る変形を被って登場している。

まず、無限の諸可能世界の設定では、肯定による差異化は、世界内の諸事物の差異化だけでなく、諸可能世界そのものの間の差異化としても働く。すなわち、個物に命名をすることによって差異化が可能のように、諸可能世界も（たとえば、 w_1, w_2, w_3, \dots のように）

区別できることになっている。こうして、肯定による差異化は、対象の区別だけでなく諸可能世界自体の区別としても、高階化して引き継がれている。

次に、インワーゲンの設定においては、肯定による差異化は、否定による差異化が立ち上げる「欠如」を埋めるようには働いていない。むしろ、「欠如（空っぽな世界）」は、肯定による差異化が生み出す諸項（諸可能世界）の一つとして位置づけられている。すなわち、欠如は肯定項によって埋められることを待つのではなくて、諸々の肯定項と並ぶ一項となっている。

これが、インワーゲンの議論における、二種類の差異化（肯定による差異化と否定による差異化）の変形を被った働き方である。ここにも、二種類の差異化の相補的な関係における、もともとの「肯定の優位」「否定の劣位」が表れている。欠如自体（空っぽな世界）が、一つの肯定項のように扱われているのだから。

二つ目の論点に移ろう。インワーゲンの議論自体の中に見いだせる、その議論自体を越えていくエレメントとは、「無」の区別に関わる論点である。「無」を問題にするかぎり、「無」を幾重にも区別することが必要である（と私は考えている。ちなみに、本稿の第 II 節においては、「欠如」としての無、「空白」としての無、「無内容」としての無（無内包）などを分けていた。以下では、更なる区別を加えることになる）。

インワーゲンによる「無」の区別とは、可能世界（空っぽな世界）の内部における「偽装された無」と「ほんとうの無」の区別であり、さらに、それらの可能世界の内部における「無」と可能世界の外部の「無」との区別である。ここには、「無」についての二段階の区別（三分）を読み取ることができる。

まず、「偽装された無」と「ほんとうの無」の区別から。インワーゲンは、当該論文の最後の方で、「偽装された無」と「ほんとうの無」の違いについて、次のように言及している。

すべての可能世界を貫く基礎的対象を認めて（たとえば『論理哲学論考』のように）、その一つ一つの「オン／オフ」「充足／空」の組み合わせによって諸可能世界を考えて、すべての基礎的対象が「オフ」あるいは「空」の状態にある世界が、「偽装された無」である。それは、潜在的には「オン」「充足」でありうるような、とりあえずの「オフ」状態としての「無」である。一方、可能世界を貫く基礎的対象の存在を認めず（非・『論理哲学論考』的な世界）、「オン／オフ」「充足／空」の両可能性を与えるような対象がそもそもない世界が、「ほんとうの無」である。たしかに、「偽装された無」と「ほんとうの無」のあいだには、電灯が消えているために暗い部屋と、そもそも電灯が存在しないために暗い部屋とのあいだのような差があるだろう。

さらにインワーゲンは、自らの議論の中で「偽装された無」とも「ほんとうの無」とも異なる水準の「無」を、（暗黙の内に）設定している。それは、「外部の無」とでも呼ぶべき無である（インワーゲンがそう呼んでいるわけではなく、私がそう呼ぶことにする）。「外部の無」は、空っぽな世界に単純さを見いだすという錯覚を退ける議論の中で登場する。

空っぽな世界がもっとも単純で、他の世界よりも出現しやすい（確率が高い）と思う錯

覚は、インワーゲンによれば次の仮定を密輸入している。それは、可能世界の外部に、可能世界に現実性を付与するような何かが存在していて、何もないという状態へと向かわせる傾向をその何かが持っていたり、何もないという状態を初期設定状態に定めたりするというような仮定である。しかし、インワーゲンによれば、諸可能世界の外部には何もないのである。したがって、インワーゲンは、空っぽな世界の高確率を認めない。

ここで注目したいのは、インワーゲンが「(可能世界の外側に位置するような存在を退けて) 外部には何もない」と言っている点である。要するに、諸可能世界の集合の外部は「無」なのである。この「無」は、明らかに、可能世界の一つとして位置づけられる「無」(「偽装された無」や「ほんとうの無」とは異なっている。そして、諸可能世界の外部には何もないこと(外部の無)が、インワーゲン自身の主張(「空っぽな世界」「内部の無」は特に生じやすいわけではないこと)を、裏から支える議論構造になっている。

このような無についての区別(二段階・三分) —(1)偽装された無 (2)ほんとうの無 (3)外部の無—には、(確率の大きさとは次元を異にする)「無の深まり」を透かし見ることができるだろう。しかし、ここにもう一段階「深まった無」を加えなければならない、と私は考える。というのも、三つの「無」はどれも、諸可能世界が存在することを前提にしたうえでの「無」だからである。第四番目の「無」として、諸可能世界がそもそもまったくないこと(可能世界自体の無)を追加すべきだろう。つまり、第四段階目の「無」とは、それ以前の段階の「無」を思考するための枠組み(この場合は「可能世界」)自体を棄却してしまう「無」ということになる((4)可能世界自体がないこと)。

ところで、私自身の議論においては、インワーゲンの「可能世界」という装置をそのまま受け継ぐわけにはいかない(「無の深まり」については、受け継ぎたいけれども)。なぜならば、私の考える「現にある(現実)」「絶対現実」は、諸可能世界の一つとして位置づけることはできないからである(インワーゲンの場合には、現実世界とは無限個の可能世界のうちの任意のどれかである)。

「現にある(現実)」「絶対現実」が、可能世界の中の一つではない理由は、その無内包性と全一性にある。無内包性ゆえに、複数個の区別ということがそもそも意味を持たないし、全一性ゆえに、複数のものの中の一つというあり方がそもそもできない。

諸可能世界の一つとして現実が位置づけられるのではなく、むしろ逆に、それが全てでそれしかない現実が端的に存在して初めて、その中で諸可能世界が想定可能になる(諸可能性は現実と相並ぶのではなく、現実の中にある)。別の言い方をすれば、現にあるという現実性は、諸々の様相(必然・偶然・可能・不可能)の中の一つなのではない。それらの諸様相すべてに先立っていて様相がない(無様相)、あるいはすべての様相が潰れて一つになっているのが、「現にあること(現実)」「絶対現実」である。

ということは、ここでの私の課題はこうなる。インワーゲンのように「可能世界」という装置を利用せずに、「無の深まり」について思考すること。すなわち、現実世界においてこそ、(4)の段階に相当するような「無」(それ以前の段階の「無」を思考するための枠組み

自体を棄却してしまう「無」)について思考すること、これである。インワーゲンの議論の中に透かし見た「無の深まり」は(ここでは特に(3)の段階と(4)の段階に焦点を絞って)、現実世界においてどのように考えたらいいのだろうか。以下は、その点についての考察である。

現実における第三段階目の「無」すなわち「外部の無」は、もうすでに、これまでの考察の中で登場済みである。現実における「外部の無」とは、「現実には外がない」ということである。それは、現実が全一的であることにおける「外部のなさ」であった。

もちろん、「現実の外のない」は、境界線によって「存在」と区分されるような「無」ではない。むしろ、どんなに現実の外を想定しようとしたとしても、そこもまた現実でしかないのであり、この点(境界線のなさ)にこそ、「外部の無」は表れている。

このような「現実の外のない」は、否定が立ち上げる「欠如」としての無や、交代や選択が仮構する「空白」としての無とは、明らかに異なる「無」である。「外部の無」「外のない」は、現実をまさに全一的な現実に行っているという点で、現実の成立自体に深く内的に関与している無である。

第四段階目に相当する「無」を、現実世界において思考するために注意しなくてはいけないのは、次の二点である。一つは、第四段階は、それ以前の段階の「無」を思考するための枠組み(インワーゲンの場合は「可能世界」)自体を棄却してしまう「無」であるという点である。もう一つは、可能世界という設定そのものがないこと(可能世界自体の無)を想定するには、現実世界そのものがないこと(現実自体の無)は想定できない(したがって、第四段階の「無」は、それとは別の仕方では思考されなければならない)という点である。

インワーゲンの諸可能世界は、相互に明確に区別されていて(w_1, w_2, w_3, \dots)、しかもすべての世界が対等(等確率)になるように、ニュートラルな(各可能世界に対して外在的で無関与な)視点によって確保されている。だからこそ逆に、その同じ視線の下で、一つ一つの世界を消去していく(オフにする)操作を追加して、可能世界が一つもない(どの可能世界も成立していない)状況を想像することに、特段の不合理はない。少なくとも、私が考えるような(それが全てでそれしかない)「現実世界」「絶対現実」の中で、可能世界の設定そのものをしないことは、十分にありうることである。

そしてこのこと(可能世界自体の無)には、ベルクソンの「無」の観念批判も登場しえない。というのも、「交代」はここでは起こらないし(可能世界どうしの交代などない)、見かけの欠如を可能にするような人間的な関心が登場する余地もないからである。

他方、それが全てでそれしかない(全一的な)現実世界の場合には、諸可能世界の場合のように、消去して無くしてしまうことを想定できない。いや、そもそもそれが何を想定することなのかさへ不明である。現実の場合には、(w_1, w_2, w_3, \dots に相当するような)消去の対象となる「内容(内包)」があるわけではないし、外部はなくそれが全てでそれしかないの、ニュートラルな(現実世界に対して外在的で無関与な)視点など、取りよう

がない。これが、「可能世界という設定そのものがないこと（可能世界自体の無）を想定するには、現実世界そのものがないこと（現実自体の無）は想定できない」ことの理由である。

それでもなお、「現実世界の無」を無理にでも想定しようとする、その「現実」は、別の水準の「現実」へとスライドしてしまうだろう（「絶対現実」が「絶対現実」ではなくなる）。たとえば、全一的な現実が、諸可能世界の中の一つの現実のスライドしたり、無内包の現実が、特定の内容を持った認識論的な現実へとスライドしたり、或いは、現実の「無」を真空状態であるかのように表象してしまったり（むしろ「無内包の現実」の方が真空状態に近いにもかかわらず）、といった具合である。

そのように「スライド」をすることなく、第四段階の「無」を考えなくてはならない。そのためにも、もう一つの注意点である「第四段階の無は、それ以前の段階の「無」を思考するための枠組み自体を棄却してしまう「無」である」という点に、注目すべきである。

この点に注目すると、無についての「対（ペア）」が浮かび上がってくる。対（ペア）とは、或る「無」の段階とその段階を思考するための枠組み自体を棄却する段階という対（ペア）である。そのような「対（ペア）」を通してでなければ、第四段階の「無」は、単独では問題にすることさえできないだろう。

そのような対（ペア）として、「死後の無」と「未生の無」を対照する場面を考えてみよう。死んで私は「無」になってしまうとしても、私は生まれる前も「無」であった。どちらも、私がまったく存在しないという点では、同じではないのか。しかも、或る意味において（独我論的な意味では）、「私の無」は、単に世界内の部分の欠如ではなくて、世界全体の無（完全なる無）だと言うこともできる。だとすれば、そのような無（完全なる無）としては、「死後の無」も「未生の無」も、何の違いもないのではないか。にもかかわらず、多く人は「死後の無」を恐れたり不安に思ったり気をつけたりはするが、「未生の無」に対してはそのような態度を取らない。一体なぜだろうか。「死後の無」と「未生の無」には、何か根本的な違いがあるのだろうか。

ひとまず、「死後の無」と「未生の無」の違いを、次のように言うことができる。「死後の無」とは、私の存在が無くなることだから、「欠如」「喪失」としての無であるが、「未生の無」は、そもそも無くなるような私が存在していないのだから、「欠如」「喪失」でさえない無である。すなわち、「死後の無」が、私の存在の消去（肯定に対する否定）としての無であるのに対して、「未生の無」は、消去すべき存在がそもそもない（肯定に対する否定でさえない）無である。

しかし、すぐに次のように付け加えるべきだろう。「死後の無」は、それを「欠如」「喪失」として体験できる主体（私）そのものの「欠如」「喪失」なのだから、通常の（部分的なものに留まることで体験可能な）「欠如」「喪失」ではない。むしろ、「死後の無」は、「欠如」「喪失」として体験する可能性自体が奪われるのだから、「欠如の欠如」「喪失の喪失」あるいは「全面化する欠如・喪失」「欠如・喪失の全面化」である。

そこで、「未生の無」も、単に「欠如」「喪失」でさえない無と言うのでは、まだ不十分であって、「欠如の欠如」「喪失の喪失」でさえない無と言うべきである。「死後の無」には、二重の否定が含まれているとすれば（喪失+その喪失の体験可能性自体の喪失）、「未生の無」には、それに加えてもう一回多くの否定が含まれている（そのような二重の喪失でさえないという三重の否定）。

もちろん、三重の否定といっても、単に同じ否定の操作が三回重ねられているのではない。〈でさえない〉という否定は、前段階までの否定の操作自体を取り消して否定以前へと遡ろうとする否定であり、遡及不可能な段階（未生）へ遡及するかのように働く否定である。つまり、時間を巻き込んで働こうとしている否定なのである。

また、〈でさえない〉という三回目の否定の中には、二回目の否定の抹消だけではなく、その抹消自体の抹消や、さらにそれ以降のすべての抹消の抹消が、一挙に折り畳まれている。たしかに、「未生の無」は「死後の無」との対照を経由することによって、〈でさえない〉という仕方で輪郭づけることができるし、そうするしか方法がない。しかし実は、そのように輪郭づける経路（三重の否定）そのものが未だないこと、「死後の無」との対照・差異そのものが未成立なことが、ほんとうの意味での「未生の無」に他ならない。その点も含めて全てを畳み込んで、〈でさえない〉という否定は作動する。三回目の否定とは、遡及的に働く自己抹消の極致なのである。

比喩的に言うならば、この三重の否定は、ビートルズの漫画映画「イエローサブマリン」に登場する掃除機に似ている（cf. ノージック）。その掃除機は、周囲の物を吸い込むだけではなく、周囲の背景までも吸い込んで、最後には全てを吸い込む自分自身をも吸い込んでしまう…。ただし、「未生の無」の場合には、全てを吸い込んだ後の「無」は、実は（後なるものではなく）先なるものだという点（遡及という点）を付け加えなければならぬ。

このような「未生の無」こそが、「それ以前の段階の「無」（ここでは「死後の無」）を思考するための枠組み自体を棄却してしまう「無」に相当する。現実における第四段階の無とは、「未生の無」という無のことだったのである。

「未生の無」と同様の第四段階の無は、「生や死」という場面以外にも見いだすことができる。いや、時間（過去・現在・未来）が働いている場面にはすべて、同様の三重否定性（遡及的に働く自己抹消の極致）を見いだすことができる。それは、いささか圧縮した仕方では述べるならば、以下ようになる。

現在と過去の関係と無関係について考えてみよう。過去はいま現在から想起されるしかないという点では、過去はいま現在との関係のもとにある【過去の想起相】。しかし、過去は、いま現在から想起される姿では（どんなにその姿を詳細で完璧なものにしたとしても）原理的に尽くすことができず、想起をはみ出す姿を持たざるを得ない【過去の想起逸脱相】。さらに、当の過去の時点では（まだ、いま現在は到来していないのだから）、「(想起相に) 尽くさない」「(想起から) はみ出す」というあり方自身がそもそもなくて、その過去の時点

でのあり方は、想起とはまったく無関係にそれ自体であるのみである【想起阻却相】。

以上の「想起相」「想起逸脱相」「想起阻却相」という三段階はすべて、現在から過去への関係と、その関係の否定（逸脱・阻却）という関係に基づいている。たしかに、そのような「関係」によって、過去の重層的なあり方は「輪郭づけられる」。しかし、いま現在などとまったく無関係であった過去（まさにその時点の過去自体）は、そのような「輪郭づけ」そのものが、そもそも未だ生じようのない過去である。したがって、ほんとうは、関係と関係の否定という「輪郭づけ」そのものの未生こそが、過去自体なのである。過去自体には、（想起の）阻却自体も阻却されて、その阻却以前へと遡及する否定（さらに、その否定自体も阻却される否定）が、働いている。つまり、三重否定性（遡及的に働く自己抹消の極致）である。このように、過去自体とは、「未生の無」同様の第四段階の無である。言い換えれば、いま現在と過去とは、関係しているのでも、関係を否定するという関係にあるのでもなくて、端的に無関係なのである。

この論点（端的な無関係性）は、過去・現在・未来が推移するものである限り（すなわち、時間が推移するかぎり）、現在と過去とのあいだだけではなく、現在と未来のあいだにも当てはまる。過去といま現在とが端的に無関係なだけでなく、いま現在と未来も端的に無関係なのである。そうすると、過去・現在・未来という時間の三相は、端的な無関係性によって貫かれていることになる。これは、「前後裁断」（cf.道元）と呼ぶのが相応しく、時間は「第四段階の無」で充ち満ちているということになる。

IV 結論

これまで第 II 節と第 III 節において、「無内包の現実（現にある）」「絶対現実」という存在と、「遡及的に働く自己抹消の極致」としての無（第四段階の無）について論じてきた。さて、この存在と無とのあいだに、「無ではなくて存在」という否定関係があるだろうか。両者のあいだには、＜ではなくて＞によって媒介される排中律保存的な否定関係など成立しない。むしろ、次のように捉えるべきである。

一つは、現実の内にこそ第四段階の無（未生の無や過去自体の無など）が含まれている、という捉え方である。実際、未生の無にしても、過去自体の無にしても、すべて、この現実（それが全てでそれしかない現実）における話であったし、それ以外の何物でもない。その意味では、「無内包の現実（現にある）」「絶対現実」という存在には、認識論的な観点での無内容が重ねられているだけではなく（cf.第 II 節）、形而上学的な観点での無（第四段階の無）も浸透している。この点では、存在と無は、（擬似）矛盾的に一体化している、とすべきである。

もう一つは、「無内包の現実（現にある）」「絶対現実」という存在と、「遡及的に働く自己抹消の極致」としての無（第四段階の無）は、端的に無関係である、という捉え方である。つまり、存在と無は、関係を持ちようがない。それは、以下の二つの理由からである。

もし「無内包の現実（現にある）」「絶対現実」が非時間的なものだとするならば、時間

的なあり方としての第四段階の無とは関係の持ちようがない（非時間的なものと時間的なものの無関係）。あるいは、もし「無内包の現実（現にある）」「絶対現実」が、時間的なものとするならば、その場合には「現実のこの今」こそが、まさに現実と時間の接点に当たるであろう。しかし、「現実のこの今」と「過去」、「現実のこの今」と「未来」とは、「前後裁断」と呼ぶのが相応しく、端的に無関係なのである（時間の中の無関係）。

こうして、かの形而上学的な問いの媒介部分の「ない<ではなくて>ある」という否定関係は却下されて、「あるかつない」（ユニット形成的な矛盾）と「あるはある、ないはない」（端的な無関係）とに行き着いたのである。